

for all I know の意味と使用, 動機付け¹

平沢 慎也

キーワード: 多義性 モダリティ 証拠性 文内位置 文体と意味 動機付け

要旨

本稿はSV+for all *sb* knows に関して以下の6つの特徴を指摘する(ただしSVは主節, *sb*はsomebodyの略で人間を指す名詞のこと)。(1)SV+for all *sb* knowsは多義であり,「*sb*は,知識・情報を十分に持っていないので,SVで提示された命題が真である可能性を否定できない」と解釈するべき場合と,「*sb*は,SVで提示された命題が真である可能性を否定できないほど知識・情報不足である」と解釈するべき場合(およびどちらと解釈しても大差ない場合)がある。(2)SVが法助動詞が含まれていなくてもSVは推量や可能性という概念と結び付けられて解釈される(断定の文とは解釈されない)。(3)話し手が発話の妥当性を確認・検証することに関心であるというニュアンスを伴う。(4)文内の位置としてはfor all *sb* knowsがSVに先行するのが最も高頻度である。(5)*sb*にはたいてい一人称代名詞(特にI)が来る。(6)口語的な文体で用いられることが多いものの,話し手が発話の妥当性の検証に関心であることが許される文脈であれば,学术论文のなかで使うことも可能である。さらに本稿は,for all *sb* knowsと他のfor all 表現,all 表現,for 表現との関連について考察し,for all *sb* knowsが英語の体系のなかで他と完全に切り離された「離れ小島」のようにはなっていないこと—動機付けられていること—を指摘する。

1. はじめに

本稿の第一の目的は,for all *sb* knows (*sb*はsomebodyの略で,最も頻度が高いのは第3.6節で示すようにfor all I know)という英語表現の意味と用法を記述することである。第二の目的は,for all *sb* knowsが他のどのような英語表現と似ているまたは関連していると考えられるかを論じることである。

なお,本稿では,言語学の専門用語の量を最小限にとどめ,高校生や大学生,高校・大学の英語教員が参照しやすいものになるよう心がけた。これは,日本で使用されているどの英和辞

¹ 本稿は2017年の日本英語学会第35回大会(東北大学)で「for all *sb* knowsの意味・用法の記述」という題目で発表した内容の誤りを修正し,大幅に発展させたものである。発表当日にコメントを下された鈴木亨先生,都築雅子先生,眞田敬介先生,長谷川明香さんに感謝を申し上げる。また,本稿の内容に関してコメントを下された西村義樹先生,東京大学大学院人文社会系研究科言語学研究室「文法の意味」研究会の皆さん(特に長時間の議論に付き合ってくださいました氏家啓吾さん),例文の容認性判断などにご協力下された柴田元幸先生,David Boydさん,Mark Rosaさん,Ash Spreadburyさん,本文の日本語表現について助言を下された数田航平さんにも感謝したい。本稿を読んだ一人でも多くの英語学習者,英語教員に「for all *sb* knowsを使ってみたい,教えてみたい」と思っただけの事を願う。

典, 英英辞典を見ても, *for all I know* に関して部分的な情報しか提供されておらず, 英語の学習と教育の現場で参照できる包括的な情報リソースが必要であると思われるからである。

本稿は記述を目的とした論文であるため, 理論的考察にはほとんど足を踏み入れない。しかし, 本稿が記述する言語事実を, 「モダリティ」(斎藤・田口・西村 2015: 222-223) と「証拠性」(斎藤・田口・西村 2015: 118) の観点から理論的に分析することもできるはずである。理論的関心から読まれる読者には, そのような読み方も可能であることを前もって指摘しておきたい。

2. 辞書の説明

私の知る限り, *for all sb knows* を記述した言語学の論文は存在しないので, 先行研究のかわりとして, 英和辞典, 英英辞典の記述と例文を見ていくことにする。まずは, 『ロングマン英和辞典』から。

(1) 『ロングマン英和辞典』 s.v. “for”

- a. *for all sb knows* 《話》 〈人〉の知る限りでは
- b. **For all I know**, she could be lying.

私の知る限り, 彼女はうそをついている可能性もある。

「私の知る限りでは」という訳語では, 「私」が「自分は豊富な(もしくは十分な)知識を持っている」と思っている可能性を排除できない。後に見るように, *for all I know* は「自分は関連する知識を十分に持っていない」と思っていることを明確に伝達する。また, 「〈人〉の知る限りでは」という訳語では *as far as sb knows* との区別もつかなくなる。3.7 節の例(33)の箇所所述べる通り, *as far as sb knows* が使えて *for all sb knows* が使えないコンテキストが存在するので, この訳語には問題がある。

次に, 『ウィズダム英和辞典』と『オーレックス英和辞典』を見てみよう。

(2) 『ウィズダム英和辞典』第3版 s.v. “know”

- a. *for all A knows* 《話》 [文頭・文尾, 時に文中で] A 〈人〉の知ったことじゃないがことによると
- b. She could be in London now, **for all I know**.
彼女はことによると今ロンドンにいるかもしれない, こっちの知ったことじゃないが。

(3) 『オーレックス英和辞典』第2版 s.v. “know”

- a. *for all* [《文》 *àught*] *I know* 自分は(よくは)知らないけれど, たぶん(♥話者の発話に対する無関心を強調する表現)
- b. Andrew Carnegie could be from Scotland **for all I know**.

アンドルー＝カーネギーはスコットランド出身かもね, まあ関係ないけど。

この2つの辞書の記述の問題点は、「無関心」という意味要素を前面に出すことによって「自分は関連する知識を十分に持っていない」という意味要素の重要性を（ゼロにはしていないものの）下げてしまっているところにある。(2)で訳語として用いられている「知ったことじゃないが」という表現は、たとえば、

- (4) お前がラーメンを食おうがシチューを食おうが知ったことじゃないが, こっちに汁を飛ばすのだけは勘弁してくれ。

のように、自分の知識の不十分さよりも関心のなさに比重を置いて使われることが多い。実際(2b)の訳は、少なくとも筆者には、(5a)よりも(5b)の解釈を促す訳であるように見える。

- (5) a. 彼女はことによると今ロンドンにいるかもしれない。彼女の居場所に関する情報をよく知っているわけではないけど。
b. 彼女はことによると今ロンドンにいるかもしれない。彼女の居場所がどこだろうとどうでもいいけど。

(3)は「(よくは) 知らないけど」という適切な指摘を含むものの、学習者はハートマーク付きで目立っている「無関心」の意味要素, および例文訳の「まあ関係ないけど」に目が行ってしまい、「自分は関連する知識を十分に持っていない」という意味要素に注意を払わない可能性がある。日本の（少なくとも一部の）英語業界で「知識を十分に持っていない」という意味要素の重要性がいかに理解されていないかは、次の記述を見てもよく分かる（これは普通の意味での「辞書」に分類されるものではないが、ここで見ておこう）。

- (6) for all a person knows 「おそらくは」とか「たぶん」と辞書では訳されているが、次の文脈中ではこの訳し方は見当違いである。Just after I had told her that I was not going out, why had she then said, “Dewa itte rasshai mase.” Of course, I had been dressed to go out, but I might have only been going for a walk in the garden, for all she knew. 「外出するわけじゃないよと言ったのに、なぜ彼女は〈では、行ってらっしゃいませ〉と言ったのか。もちろん、私が外出用の服装に着替えていたことは確かなのだが、それにしたって家の庭を散歩しに外へ出るだけだったかもしれないではないか。**そんなことぐらいわかっていてもよかったはずなのに**」。ずいぶん長い訳し方だが、この文脈では for all a person knows はだいたいこんな意味合いになるのではあるまいか。

(中村 2002: 273)

I might have only been going for a walk in the garden, for all she knew の解釈が決定的に間違っている。これは「家の庭を散歩しに外へ出るだけだったかもしれないではないか。彼女は私の予定なんて知らないのだから」の意である。インフォーマント（アメリカ英語母語話者）によれば、for all she knew は she didn't know ということだから、「そんなことぐらいわかっているにもかかわらずなのに」では英文の意味と正反対のことを言っているように聞こえる、とのことである。

『ジーニアス英和辞典』の第5版は、筆者の考えでは、各社英和辞典の中で最も for all sb knows の使用実態に近い記述を提示してくれている²。

(7) 『ジーニアス英和辞典』第5版 s.v. “know”

- a. for all S *knóws* 《略式》よくは知らないが、ひょっとすると《◆(1) 当て推量で物を言う時に使う。(2) 無関心さを表し、誇張表現と共に用いることが多い》
- b. “Who’s that woman he’s going out with?” “**For all I know**, she could be the Empress of China.”
「彼がデートしているあの女性はだれ？」「ひょっとしたら中国の女帝かもね」(=I don’t care who she is.)

しかしこの記述にもやはり問題がある。for all sb knows という表現に慣れていない学習者は例文を見て the Empress of China 「中国の女帝」はどこから出てきたのかと不思議に思うだろう。これが「誇張表現」なのだとしたら何の誇張なのか。I don’t care ... で書き換えられていることから、無関心の誇張であるように見えてしまうが、正しくは無関心の誇張ではなく無知の誇張、手持ちの情報の少なさの誇張である（脚注6も参照）。また、学習者からすれば、中国の女帝の例文と、(1)の **For all I know**, she could be lying. や(2)の She could be in London now, **for all I know**. が同じ for all I know の例文であるということにはまず納得がいかないだろう。

続いて英英辞典の該当項目を検討しよう。学習者用の電子辞書に入っている英英辞典はたいいてい *Longman Dictionary of Contemporary English* (略称 *LDOCE*) と *Oxford Advanced Learner’s Dictionary* (略称 *OALD*) である。学習者の混乱を味わっていただくために、あえて訳をつけずに提示する。

(8) *LDOCE*, s.v. “know”

- a. for all I know: used to emphasize that you do not know something and say that it is not important to you
- b. I don’t know where she is. She could have been kidnapped **for all I know**.

(<https://www.ldoceonline.com/dictionary/for-all-i-know>, 最終アクセス 2018 年 1 月 21 日)

(9) *OALD*, s.v. “know”

² なお、『ジーニアス英和辞典』の第4版では「for all I *knów* 《略式》よくは知らないが、たぶん」とだけ書かれており、補足説明も例文も提示されていなかったのだが、第5版では大幅に改訂されている。

- a. for all you, I, they, etc. know (*informal*) used to emphasize that you do not know something and that it is not important to you
- b. She could be dead **for all I know**.

(https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/american_english/know_1#know_1__407,

最終アクセス 2018 年 1 月 21 日)

定義文がほぼ同じであることに驚いてしまうが、それはさておき、こ（れら）の英英辞典の問題は、定義文中の“something”が例文のどこと対応するのかが分からないこと、for all *sb* knows の部分が結局何を意味するのかが分からないこと、for all *sb* knows と主節部分（例文で言えば *She could have been kidnapped* と *She could be dead* の部分）がどのような意味関係にあるのかが分からないことである。この三点を一言でまとめるなら「ほとんど全ての対応関係が不明瞭であること」である。

以上、英和辞典と英英辞典の記述を見てきたが、複数の辞書を閲覧した熱心な学習者がこれらの記述を見ていかに混乱するかを想像してみていただきたい。もちろん、辞書間で訳語や例文の性質が少しずつずれていることによって、当該表現の守備範囲の広さが分かって有益であることも多い。しかし、そのずれがここまで大きくなると、学習者にとっては混乱の元でしかないだろう。

3. 本稿の記述

3.1 記述の要約

ここではまず、第3節で提示する記述の要約を示す。(10)のaからfがそれぞれ第3.2節から第3.7節の内容に対応している。

(10) For all *sb* knows+SV の特徴

a. [第3.2節で詳説]

For all *sb* knows+SV は、表面的には「*sb* は関連する知識・情報を十分に持っていないので、*sb* にとって〈提示命題〉は真である可能性もある命題だ [*sb* は〈提示命題〉が真である可能性を否定できない]」という意味であるが、発話目的（話し手が最も伝えたい内容）に注目すると、3通りの用法があると言える。

用法 I—用法 II—用法 III の連続体（話し手が最も伝えたい内容を太字で表記）³

I 私（話し手）は「*sb* は関連する知識・情報を十分に持っていないので、***sb* にとって〈提示命題〉は真である可能性もある命題だ [*sb* は〈提示命題〉が真である可能性を否定できない]**」と言いたい。

³ (10a)で用いられている〈提示命題〉という用語は本稿独自の用語で、SV から「かもしれない」など推量に対応する要素を除いた内容を指す。

II 私（話し手）は「*sb* は関連する知識・情報を十分に持っていないので、***sb* にとって〈提示命題〉は真である可能性もある命題だ**【*sb* は〈提示命題〉が真である可能性を否定できない】」と言いたい。

＝私（話し手）は「〈提示命題〉が真である可能性を否定できないほど、***sb* は関連する知識・情報を持っていない**」と言いたい⁴。

III 私（話し手）は「〈提示命題〉（※常識的に考えて偽であると断定できそうな命題）が真である可能性を否定できないほど、***sb* は関連する知識・情報を持っていない**」と言いたい。

b. [第 3.3 節で詳説]

SV が推量や可能性を表す法助動詞を伴うことも伴わないこともあるが、いずれにせよ For all *sb* knows + SV 全体としては「ひょっとしたら」「かもしれない」「可能性もある」という意味が含まれる。

c. [第 3.4 節で詳説]

話し手が発話の妥当性を検証することに無関心であり、適当にものを言っている、というニュアンスを伴う。

d. [第 3.5 節で詳説]

for all *sb* knows が SV に先行するのが最も高頻度で、割合としては 70%を越える。SV の後ろにまわる場合には、たいてい SV が法助動詞を伴う。

e. [第 3.6 節で詳説]

for all *sb* knows の *sb* は一人称代名詞（なかでも特に I）であることが多い。

f. [第 3.7 節で詳説]

やや口語的で、主に会話や小説において用いられる。ただしこの口語性は「適当にものを言う」という意味要素から来るものであり、適当にものを言うことが許される文脈ならば学术论文のなかでも用いられる。

この複雑で豊かな意味と使用の特徴は一言で捉えきれるものではない。英和辞典、英英辞典の定義と説明はどれも、これらの特徴のごく一部を拾っただけのものになっており、学習者が for all *sb* knows を適切に使えるようになるための情報を提供できているとは言えない。

以下では、この記述が第 2 節で見た各辞書の記述とどのような点で異なっているかを見ていくことにする。(10)で用いた各表現の意味は、そのなかで詳述する。

3.2 多義なのか

(10)の記述が第 2 節で見た辞書の記述と大きく異なっている点の 1 つは、For all *sb* knows + SV

⁴ 用法 II のイコール記号（＝）は、イコールの前後のどちらの意味で解釈しても文脈や状況に矛盾せず、実質的な違いが発生しない、という意味で用いている。

を発話目的に関して多義的な表現と見なしている点である。具体的には、筆者の考えでは、For all *sb* knows + SV の発話目的が「*sb* には、〈提示命題〉がひょっとしたら真である可能性もある命題であるように思える」ということを指摘することにある場合（用法 I）と、「*sb* は関連する知識・情報を十分に持っていない」ということを指摘することにある場合（用法 III）があり、さらにはそのどちらと考えても大差ない場合（用法 II）がある。以下、事例で確認しよう。

3.2.1 用法I

(11)は用法 I の例である。「正義」をうたったある詩の作者が誰なのかということについて刑事コロンボに質問されて、男性が答える場面である。

- (11) I discovered that bit of doggerel on the subject of justice scratched on the wall of a prison cell.
For all I know it may still be there, although I haven't checked lately.

(Columbo, Episode 44, The Conspirators)

正義についてのその下手くそな詩は、刑務所の壁に書きなぐられていたんです。どうでしょう、まだ残っている可能性もあるんじゃないですかね。まあ最近見たわけではないですけど。

For all I know it may still be there の意味は、「私は関連する知識・情報を十分に持っていないので、ひょっとするとその詩がまだ刑務所の壁に残っている可能性も否定できない」ということである。発話者の男性がここで一番言いたいことは、「私は関連する知識・情報を十分に持っていない」ということの方ではなく、「ひょっとするとその詩がまだ刑務所の壁に残っている可能性も否定できない」ということの方である。もしも For all I know it may still be there で一番言いたいことが「私は関連する知識・情報を十分に持っていない」なのだとすると、続く I haven't checked lately とのつながりは逆接ではなくなってしまう、although という接続詞が用いられていることの説明がつかなくなる。

(12)も用法 I の例である。ある日、次期上院議員の John Ashworth と妻の Emily Ashworth がウォールストリートを歩いていた。Emily は paranoia「被害妄想」の激しい女性であり、John だけでなく警護担当者からも迷惑がられている。特に、人混みのなか夫婦揃って銃で殺される夢を見てからというもの、何者かに襲われるのではないかという恐怖に取り憑かれている。その恐怖はウォールストリートで沸点に達し、ニューヨーク・タイムズのカメラマンが John に向けたカメラを銃と勘違いし「銃を持ったあの男を捕まえて！」と叫んでしまう。カメラマンはその場にいた警官により射殺されてしまった。ホテルに移動した後、John は怒り狂って Emily にこのように言う。

- (12) You saw a camera! [...] A young man is dead because of your inane, irrational paranoia.
[...] You need help, Emmy. The drinking has gone out of control again. For all I know, you

were drunk this afternoon.

(Stephen Frey, “Paranoia”)

お前が見たのはカメラだったんだよ！[...] 若者が一人、お前の馬鹿げた意味不明の被害妄想のせいで死んだんだぞ。[...] エミー、医者にご相談しよう。また酒が止まらなくなっているじゃないか。私からすれば、お前が今日の午後も酔っ払ってたって不思議はない。

For all I know により伝わるのは、Emily がその日の午後本当に酔っ払っていたかどうかなど知らない、それを示す証拠など持っていない、ということである。しかし、For all I know, you were drunk this afternoon 全体の意味の焦点は「私は今日の午後のお前の状態についての知識・情報を十分に持っていない」ということにあるのではない。それでは直前の The drinking has gone out of control again という文との意味的なつながりがおかしくなる。正しくは、For all I know, you were drunk this afternoon 全体の意味の焦点は、「自分には事件当日の午後にお前が酔っ払っていた可能性が排除できないのだ」ということの方にある。この解釈であれば、The drinking has gone out of control again という文とも問題なくつながる（なお、この夫は作品の複数箇所ですべて妻を医者に連れていきがっているが、いま見た解釈はそのことともスムーズにつながる解釈である）。

3.2.2 用法III

今度は For all *sb* knows+SV の発話目的が「*sb* は関連する知識・情報を十分に持っていない」ということを指摘することの方にある場合を見てみよう。(13) は、24 世紀を生きている Janeway と Chakotay が 1996 年という大昔の地球に上陸し、会話をしながら歩いていると、途中でローラースケートをはいた女性がぶつかってくる、という場面である。

- (13) Chakotay: Maybe I should look up a few ancestors. As I recall, one of them was a schoolteacher in Arizona.
Janeway: I don't know what *my* relatives were doing this far back in history.
Rollerskater: Coming through. Sorry.
Janeway: **For all I know**, she could be my great, great, great, great grandmother.
Chakotay: Ha ha. She does have your legs.

(*Star Trek: Voyager*, Season 3, Episode 8, Future's End, Part 1)

チャコティ： 何人か先祖のところに行ってみようかな。記憶が正しければアリゾナで教師をしている人がいたはず。

ジェインウェイ： 私はこんな大昔に先祖が何をしていたかなんて分からないわ。

スケーター： 通ります。ごめんなさい。

ジェインウェイ： 今ぶつかってきた人が私の曾曾曾曾婆さんと言われても信じるくらいよ。

チャコティ： ははは。確かに脚が似てる。

Janeway は、この時代についてある程度の知識を持っている Chakotay とは異なり、この時代のことをよく分かっていない。この知識の有無のコントラストは、会話の内容だけでなく、Janeway が斜体部分にストレスを置いている (*I don't know what my relatives were doing ..., For all I know ...*) ことからもうかがえる。すると、Janeway が *For all I know, she could be my great, great, great, great grandmother* という発話で伝達したかったのは、「スケーターが自分の曾曾曾曾婆さんである可能性がある」の方ではなく、「自分には知識・情報がない」の方であると考えるのが自然だろう。*she could be my great, great, great, great grandmother* というのはあくまで冗談であり、本当に言いたいのは、スケーターが自分の曾曾曾曾婆さんである可能性を否定できないほどに自分にはこの時代に関する知識・情報がないということなのである。Chakotay の *She does have your legs* という発話も、冗談に乗っかっているだけであり、本気でスケーターが Janeway の曾曾曾曾婆さんであると信じ始めたわけではないだろう (Ha ha と笑い声をあげた後の発話であることにも注意)⁵。

次の例(14)では、元共産主義国の出身のギター弾きである語り手が、アメリカ人歌手のミスター・ガードナーとボートに乗って川を進んでいく。ミセス・ガードナーの待つ部屋のそばに来たら、その部屋に向かって歌を歌うという計画 (いわゆる「サプライズ」) を実行しようとしているのだが、語り手はアメリカ人であるガードナー夫妻と自分の違いに戸惑いを感じている。

- (14) And these were Americans, after all. **For all I knew**, when Mr. Gardner started singing, Mrs. Gardner would come to the window with a gun and fire down at us.

⁵ なお、*my great, great, great, great grandmother* という表現だけを見て文脈を無視して用法 III の例であると決めつけることはできないことに注意が必要である。次の例を見てみよう。主人公ハリーがパーセルマウス (Parselmouth) だということが発覚した直後の場面である。パーセルマウスとは蛇の言語を喋る能力を持った者を指す。冒頭のサラザール・スリザリン (Salazar Slytherin) は中世期の魔法使いの名前である。

- (i) Hermione: Salazar Slytherin was a Parselmouth. He could talk to snakes too.
 Ron: Exactly. Now the whole school's gonna think you're his great great great grandson or something.
 Harry: But I'm not. I can't be.
 Hermione: He lived a thousand years ago. **For all we know**, you could be.
 (映画 *Harry Potter and the Chamber of Secrets*)
 ハーマイオニー: サラザール・スリザリンはパーセルマウスだったの。彼も蛇と会話できたのよ。
 ロン: そういうこと。だからハリーはこれから学校中の皆にサラザール・スリザリンの曾曾曾孫か何かだと思われるだろうね。
 ハリー: 曾曾曾孫なんかじゃないし。そんなことあるわけないだろ。
 ハーマイオニー: サラザール・スリザリンが生きてたのは千年も前のことなのよ。ありえない話じゃないかも。

最後の発話で、ハーマイオニーは、自分がサラザール・スリザリンの曾曾曾孫であることを否定しようとするハリーに対して、「千年も昔のことなんて私たちは知らないのだから、あなたがサラザール・スリザリンの曾曾曾孫である可能性だって、否定はできないでしょう」と反論しているのである。ここでは、*you could be great great great grandson or something* は冗談などではなく、その可能性が真剣に検討されている。従って、(i)は用法 I の例であるということになる。(i)の *his great great great grandson or something* と(13)の *my great, great, great, great grandmother* は大げさに見える表現という点で表面的には非常によく似ているが、文脈を考慮しない限り用法 III の例と言えるかどうかの判断はできないのである。

(Kazuo Ishiguro, “Crooner”)

結局この人たちはアメリカ人なのだ。私はアメリカ人のことなんてろくに知らないわけで、ミスター・ガードナーが歌いだしたらミセス・ガードナーが窓際に銃を持ってやってきて私たちに発砲してくる、という可能性すら否定できないほどだ。

この用例では、語り手が「ミセス・ガードナーが窓際に銃を持ってやってきて私たちに発砲してくる」と本気で思っているわけではない。もし本当にその可能性が少しでもあると思っているのなら、この計画を途中でやめにするはずだが、作品の続きの部分で計画は続行されており、また語り手が恐怖を抱いているような描写もない。したがって、(14)の「ミセス・ガードナーが窓際に銃を持ってやってきて私たちに発砲してくる」というのは、あくまで極端な事例として持ち出されているだけで、ある種の誇張であり、語り手が本当に言いたいのは、この極端な事例の可能性を否定することができないくらいにアメリカ人のことを自分はよく分かっているのだ、ということである⁶。

用法Ⅲの〈提示命題〉は、上の例からわかるように、真である可能性が限りなくゼロに近い命題であり、その意味では、ある種の冗談として持ち出された命題であると言ってよい。そのまるで冗談のような命題すら否定できないほど *sb* は知識・情報を持っていないのだ、というようにして *sb* の知識・情報不足を誇張する。これが用法Ⅲのからくりである。

3.2.3 用法Ⅱ

以上、用法Ⅰと用法Ⅲの例を見てきた。しかし、多くの多義的表現がそうであるように、for all *sb* knows に関しても、用法と用法の間（グレーゾーン）に位置していると言うべき例が見つかる。それが用法Ⅱにあたる。たとえば(6)の例を見直してみよう。

- (15) Just after I had told her that I was not going out, why had she then said, “*Dewa itte rasshai mase.*” Of course, I had been dressed to go out, but I might have only been going for a walk in the garden, **for all she knew**. ((6)より)

外出するわけじゃないよと言ったのに、なぜ彼女は〈では、行ってらっしゃいませ〉と言ったのか。もちろん、私が外出用の服装に着替えていたことは確かなのだが、それにしただけ家の庭を散歩しに外へ出るだけだったかもしれないではないか。彼女は私の予定なんて知らないのだから。

この例では、語り手が家の庭を散歩しに外へ出るだけだったかもしれない可能性を問題の女性

⁶ ここで、用法Ⅲは無知を誇張しているのであって無関心を誇張しているのではないことに注意されたい。(13)は「今のスケーターが誰なのかなんて本当にどうでもいいわ」と言っているのではない。(14)も「撃ってくるかどうかなんて興味なし」と言いたいのではない。私が『ジーニアス英和辞典（第5版）』の記述(7)を問題視したのはこのような事実を踏まえてのことである。

が否定できないことと、語り手の予定などを問題の女性が詳しく知らないことがほとんど同値の関係にある。そのため、「*sb* からすれば〈提示命題〉は真である可能性のある命題である」ことを指摘することと、「*sb* は十分な情報・知識を持っていない」と強調することのどちらが I might have only been going for a walk in the garden, for all she knew という文の発話目的であるかを断定することはできない。

次の例は英語の文法書から採ったものである。(16)を含むセクションの趣旨は、不定冠詞によって導かれた名詞句が指示対象を持つこともあるが持たないこともある、ということである。

- (16) From this sentence (=“Leonard wants to marry *a* princess who speaks five languages.”), we cannot tell whether Leonard knows a certain princess and wants to marry her, or whether he has simply laid down exceptionally stringent qualifications for his future wife. **For all we know**, there may be no princess who speaks five languages in existence.

(Quirk et al. 1985: 273)

Leonard wants to marry *a* princess who speaks five languages. 「レナードは五カ国語を話せる王女と結婚したがっている」というこの文だけを見ても、レナードが特定の王女を知っていてその王女と結婚したがっているということなのか、それとも、単に将来の妻に求める非常に厳しい条件を述べただけなのか、分からない。そもそも五カ国語を話す王女が存在していない可能性もある。

For all we know から始まる文を「我々に与えられる情報が少ないので、五カ国語を話す王女が存在していない可能性も否定できない」と読んでも、「五カ国語を話す王女が存在していない可能性を否定できないほど、我々に与えられる情報が少ない」と読んでも、この文法書の当該セクションの趣旨には反しない。

用法Ⅱの例をあと1つだけ見ておこう。TV ドラマ『奥さまは魔女』から採ったものである。聞き手が、見てもいないコート話し手から買おうとしている場面である。それも、*So how about \$8,500?* と高額を支払おうとしている。

- (17) You haven't even seen the coat. **For all you know**, it might have a hole in the pocket.
(*Bewitched*, Season 3, Episode 25, Charlie Harper, Winner)
お前、そのコートを見てすらいらないじゃないか。ひょっとしたらポケットに穴があいているかもしれないんだぞ。

(17)の2文目の発話目的に関して2通りの考え方が可能である。まず、この文を「ポケットに穴があいていても分からないくらい、お前はそのコートのことを何も知らないじゃないか」と解釈して、主な発話目的が「*sb* は十分な情報・知識を持っていない」と強調することにあると考えることができる。その一方で、「お前はそのコートのことを何も知らないのだから、ポケッ

トに穴があいている可能性だってあるじゃないか」と解釈して、主な発話目的が「*sb* からすれば〈提示命題〉は真である可能性のある命題である」と指摘することにあると考えることもできる。このいずれの解釈を採用しても、前文（*You haven't even seen the coat*）や発話場面・状況と矛盾せず、文意に大きな違いがあるようには感じられない。だからこの文は用法Ⅱの例であるということができる。

3.2.4 用法Ⅰ, Ⅱ, Ⅲの関係についてのまとめ

以上、用法Ⅰ, Ⅱ, Ⅲを順に見てきた。本節ではこの3つの用法の関係について整理しておく。For all *sb* knows, SV. は、用法Ⅰ, Ⅱ, Ⅲのどれなのかということに関係なく、表面的には（または字面上は）、「*sb* は関連する知識・情報を十分に持っていないので、*sb* は〈提示命題〉が真である可能性を否定できない」ということを表す。しかし、発話目的に関して多義性が見られる。話し手が一番言いたいことは、用法Ⅰの場合には、「*sb* からすれば〈提示〉命題が真である可能性を否定できない」ということであるが、用法Ⅲの場合には、「*sb* は情報や知識を十分に持っていない」ということである。このように発話目的が大きく異なる用法Ⅰと用法Ⅲが存在し、その中間にそのどちらとも解釈できる用法Ⅱが存在する⁷。

⁷ 3つの用法を整理したところで、用法Ⅰについて補足したい。筆者は、用法Ⅰの For all *sb* knows + SV の意味記述として適切なのは、(10a)から分かるように、(i)であって(ii)ではないと考えている。

- (i) 私（話し手）は「*sb* は関連する知識・情報を十分に持っていないので、*sb* にとって〈提示命題〉は真である可能性もある命題だ [*sb* は〈提示命題〉が真である可能性を否定できない]」と言いたい
- (ii) 私（話し手）は「*sb* は関連する知識・情報を十分に持っていないが、*sb* にとって〈提示命題〉は真である可能性もある命題だ [*sb* は〈提示命題〉が真である可能性を否定できない]」と言いたい

ここで混乱の元となるのが、英和辞典を見てみると、for all *sb* knows の訳語として、「知らないけど」や「知ったことではないが」など、逆接表現を用いたものがよくあげられているという事実である。また、本稿の例文(11)も、

- (iii) 知りませんが、まだ残っている可能性もあるんじゃないですかね。まあ最近見たわけではないですけど

というように逆接表現を用いて訳しても、日本語としておかしいようには感じられない。しかし、これらの訳語は *sb* が一人称の場合には適切なものとなりうる（あくまでも「なりうる」）が、そうでない場合には不適切な訳語となる。たとえば例文(17)を「お前は知識・情報不足だが、穴があいている可能性を否定できない」のように訳すのは不自然である（「…だから～」がよい）。したがって、*sb* が一人称である場合に限定していない(10a)の記述に「が」や「けど」といった日本語を含めるのは好ましくない。

さらに複雑なことに、*sb* が一人称である場合に限っても、「が」や「けど」が完全に自然に響くためには、発話状況が「話し手が情報不足の状態でものを言うことが不適切に感じられるような状況」でなければならない。たとえば脚注5のように、あまりにも大昔のことで情報がないからこそものが言える、という状況では、「知らないけど」がやや不自然に響く。すると、(10a)の記述に「が」や「けど」といった日本語を含めるのはなおのこと不適切だということになる。

なお、*sb* が一人称で、かつ発話状況が「話し手が情報不足の状態でものを言うことが不適切に感じられるような状況」である場合に、訳語として「私_xは知らないが」や「私_xは知らないけど」も適切になるといっても、このときの「私_x」と、「私_yは知らないの」や「私_yは知らないのだから」など(10a)に沿った訳し方をした場合の「私_y」とでは役割が異なる、ということに注意しなければならない。具体的には、「私_xは知らないが」の「私_x」は発話行為を行う役目を負った「私」であり、「私_yは知らないのだから」の「私_y」は〈提示命題〉の可能性について推量する「私」である。「私_x」は、ものを言う以上、知識・情報を持っていることが期待されるので、「私_xは知らない」ということと、「私_xがものを言う」という発話行為が、「けど」の逆接関係を結ぶ。会話の期待を裏切るという意味において逆接なのであり、「私_xは知らないけど」がつながっていく先は、

3.3 法助動詞の有無について

ここでは(10b)について検証する。For all *sb* knows + SV は, SV が推量や可能性を表す法助動詞を伴っていない場合であっても, 推量・可能性の意味を含む。これを端的に示す証拠が以下の例である。

- (18) The girl may have moved. She may have gone off to college. She may have entered a convent. **For all I know**, the girl was buried alive in the Arabian sands. All I know is, she's not here.

(<http://english.stackexchange.com/questions/92207/what-is-the-correct-definition-and-usage-of-for-all-i-know>, 最終アクセス 2017 年 2 月 22 日)

その女の子は引っ越したのかもしれない。大学に行くためかも。修道院に入ったのかも。ひょっとしてアラビアの砂漠で生き埋めにされたなんて可能性も。分かっていることは, その女の子は今ここにいないということだけだ。

問題の少女が引っ越したのか大学に行ったのか修道院に入ったのかも知らない, そして知っていることは今ここにいないということだけであるのに, アラビアの砂漠で生き埋めにされたことを事実として知っているということは考えられない。the girl was buried alive in the Arabian sands に「ひょっとしたら」「かもしれない」「可能性もある」の意味が込められていることは明らかである。

似た例を 2 つ追加したい。

- (19) This was the only one he chose to publish. **For all we know**, it was the only one he chose to write. (映画 *Finding Forrester*)

これは彼が出版することを選んだ唯一の作品です。ひょっとしたら, 書くことを選

ものを言うという発話行為なのである。一方, 「私_Yは知らない」において, 「私_Yは知らない」ことと順接の関係をとり結んでいる相手は「私から見れば〈提示命題〉は真の可能性はある」である。人間は手持ちの情報・知識が少ないと, 何かの命題について「可能性 0%だ」と思いにくくなる。だから, 「私_Yは知らない」と「私から見れば〈提示命題〉は真の可能性はある」は順接の関係を結ぶ。

このように「私」の分裂(私_X→私_Y)とつなぎ言葉の分裂(けど→ので)に連動関係があることは, 次のような例文をみるとよくわかる。やや人工的な例文ではあるが, 連動関係の理解には十分だろう。

- (iv) 私_Yは情報を全然知らないので, 彼がまだ生きている可能性だって, あるんじゃないかって思っています。まあ, 私_Xは知らないわけですけど。

この分裂の観点から(10a)の記述についてコメントを加える。英語の for all *sb* knows の *sb* が一人称であるとき, そこに常に関わっているのは一人称_Yのほうである(状況によっては(11)のように「一人称_Xも関わっている」と解釈できることもあるが)。となると, (10a)の記述で選択すべきつなぎ言葉としてより適切なのは, 一人称_Yと連動する「ので」の方である, と言える。

この長い脚注の最後に, 話し手の分裂という発想や例文(iv)のもととなるアイデアは, 東京大学大学院人文社会科学系研究科言語学研究室の氏家啓吾さんから頂いたものであることを明記しておく。

んだ唯一の作品だという可能性もあります。

- (20) **For all we know**, there's been an impostor on board.

(*Star Trek: Voyager*, Season 5, Episode 4, In the Flesh)

ひょっとしたら私たち、なりすまし（＝人間になりすました危険生物）と旅をともしてきたのかもね。

(19)はある国語教師の授業中の発話である。若い頃にたった一作だけを残して消えた謎の小説家 William Forrester について講義をしているところである。This was the only one he chose to publish は事実として提示できるが、it was the only one he chose to write については情報がなくて事実として断定できない。したがってここには「ひょっとしたら」「かもしれない」「可能性もある」という意味が込められていると考えざるをえない。(20)は宇宙船の艦長の発話である。危険生物が人間になりすまして船内に侵入していることが確定したわけではないが、仮にそうだったとして本物の船員が命を奪われないように警戒態勢に入るべきだと提案している場面なので、「ひょっとしたら」「かもしれない」「可能性もある」の意味を読み込んで解釈するのが自然だ。

このように、For all *sb* knows+SV は、SV が推量・可能性の法助動詞を伴っていない場合であっても、推量・可能性の意味を含むわけだが、このような現象は一部の副詞 (probably, perhaps, maybe など) を含む節に同様に見られる。下線部に法助動詞が含まれていないことに注意されたい。

- (21) a. Yet character is **probably** the most difficult aspect of the art of fiction to discuss in technical terms.

(David Lodge, *The Art of Fiction*)

とはいえ、小説作法の中でこれ（＝登場人物）ほど専門的な議論が難しい要素もないだろう。

(柴田元幸・斎藤兆史（訳）『小説の技巧』)

- b. Had he actually spoken these words out loud? **Perhaps** he had done so [...]

(Kazuo Ishiguro, *The Buried Giant*)

実際に口に出してその言葉を言っていたのか？言っていたのかもしれない [...]

- c. “In business, people negotiate to win. They negotiate to get what they want. **Maybe** you're too used to that. Love is different. Love is when you are as concerned about someone else's situation as you are about your own.

(Mitch Albom, *Tuesdays with Morrie*)

ビジネスの世界では、勝つために交渉する。ほしいものを獲得するために交渉する。君はそれに慣れすぎているのかもしれないよ。愛はちがう。愛は、自分のことと同じようにほかの人の立場を気にかけるものなんだ。

(別宮貞徳（訳）『モリー先生との火曜日』)

本節で指摘した For all *sb* knows+SV の特徴は、for all *sb* knows がこういった副詞類の一種とし

て見なすべきものであることを示している。

3.4 何に対する「無関心」か

3.4.1 〈提示命題〉の真偽に対する無関心ではない

ここで、複数の英和辞典と英英辞典が指摘していた「無関心」とは何に対する無関心のことなのか、考えてみたい。記述(10)のcに対応する。もしも辞書記述のなかの「無関心」が、「〈提示命題〉が真であるかどうかに対する無関心」を指すのならば、その記述は誤りであると言わざるをえない。

たとえば、既に出した例(12)と(20)（以下、(22)と(23)）として再掲）では、〈提示命題〉の真偽が、それぞれ *sb* の政治生命と *sb* の安全に重大な影響を及ぼす。

- (22) You saw a camera! [...] A young man is dead because of your inane, irrational paranoia. [...] You need help, Emmy. The drinking has gone out of control again. **For all I know**, you were drunk this afternoon. (= (12))
- (23) **For all we know**, there's been an impostor on board. (= (20))

具体的には、(22)の話し手は聞き手（妻）がその日の午後酔っ払っていたかどうかには、その日の奇行との関連で、関心を持っていると考えられる。(23)を発話した艦長は、船員たちの命を預かっている身分であること、そして、警戒態勢に入る指示を出していることから、旅をともしてきた船員のなかに「なりすまし」（＝人間になりすました危険生物）が紛れているかどうかには関心を持っていると考えられる。このように、*sb* が「〈提示命題〉が真でも偽でもどうでもいい」と思っているとは考えにくい。

さらに、「〈提示命題〉の真偽に強く関心を持っている」と明示されている(24)のような実例もある。Sachs という男性が Lilian という女性の家に居候をし始めたときのことが描かれている場面である。以下の全文を、特に下線部に注意しながら、読んでいただきたい。

- (24) For the first twelve or fifteen days, she scarcely said a word to him. He had no idea what she did during her long and frequent absences from the house, and though he would have given almost anything to find out, he never dared to ask. Discretion was more important than knowledge, he felt, and rather than run the risk of offending her, he kept his curiosity to himself and waited to see what would happen. [...] On two or three occasions, she did not return until the following morning [...]. Sachs assumed that she spent those late nights in the company of men—perhaps one man, perhaps different men—but it was impossible to know where she went during the day. It seemed likely that she had a job of some kind, but that was only a guess. **For all he knew**, she could have spent her time driving around in her car, or going to the movies, or standing by the water and looking at the waves.

(Paul Auster, *Leviathan*)

最初の二週間くらい、リリアンはほとんど口をきかなかった。家を長時間、頻繁に留守にしているあいだ、彼女が何をしているのかはまったくわからなかった。知りたい気持ちはものすごく強かったものの、面と向かって訊くわけには行かなかった。知ることより慎重にふるまうことの方が大事だと思ったし、彼女を怒らせる危険を冒すよりは、好奇心は自分の胸にとどめて様子を見た方がいい。[...] 二度か三度は翌朝まで帰ってこなかったこともあって [...]。夜遅くの時間はきっと男と過ごしているのだろう、とサックスは考えた。いつも同じ男と、あるいはいろんな男と。だが昼のあいだ彼女がどこに行くのかはまったくの謎だった。どうやら何か職についているらしかったが、それも推測にすぎない。ひょっとしたら一日じゅう車を走らせているだけかもしれない。あるいは映画を見ているとか。水辺に立って波を眺めているとか。

(柴田元幸 (訳) 『リヴァイアサン』)

サックスは、リリアンが家を留守にしている間に何をしているのか、気になって仕方がないのだから、「一日じゅう車を走らせているだけ」であるかどうかに関心だとは言い難い。

3.4.2 自らの発話の妥当性を検証することへの無関心

筆者の考えでは、for all *sb* knowsを用いる話し手が無関心であると言えるのは、自分の発話が妥当な発話であるかどうかを検証することに無関心だという意味においてである。やや口語的な言葉を使って言い換えるならば、for all *sb* knowsを用いる話し手は適当にもの言っており、その適当さがここでいう「無関心」の内実だ、ということである。以下では、発話の妥当性の検証への無関心、または適当なもの言い、という言葉がどのような意味で用いているのかを、いくつか場合分けをしながら示していきたい。

まず、*sb*が二人称または三人称である場合について考える。この場合、用法I, II, IIIのいずれであれ、for all *sb* knowsの使用者は、「彼の目には〈提示命題〉が真である可能性のある命題に映っているはずだ」とか「あなたはこのくらい無知であるはずだ」とかいったように、自分以外の人間の知識状態について判断を下していることになる。他人にとっての命題の見え方や他人の知識状態を決めつけて発話しているのである。このような決めつけが妥当であるかどうかを検証することに無関心であるというのが、*sb*が二人称または三人称の場合の「発話の妥当性の検証への無関心」の内実である。

SF作品から採った例(25)で具体的に見てみよう⁸。the Mouse, the Icemanというのはそれぞれ女性と男性のニックネームである。三人称単数*he*はここではthe Mouseとthe Icemanの敵を指す。

(25) “Why won’t he come after us right now?” asked the Mouse.

⁸ これは用法IIの例である。

“Because **for all he knows**, we’ve got the whole route mined and booby-trapped,”
answered the Iceman.

(Mike Resnick, *Soothsayer*)

「どうして今すぐには追ってこないって言い切れるのよ」とネズミが尋ねた。

「そりゃあ、あっちからしたら経路の端から端まで地雷と爆弾がセットされてる
かも分かんわけだからなあ」と氷男は答えた。

この例に現れている話し手 (the Iceman) は検証に無関心で、決めつけに基づいて適当にもの
言っている。具体的には、この話し手は、本当に敵 (he) がこちら側の状況について無知で、
「経路の端から端まで地雷と爆弾がセットされているかもしれない」と考えているかどうかを
検証することに関して無関心である。敵 (he) の知識状態を決めつけて適当なもの言いをし
ている。

次に、*sb*が一人称である場合を見てみよう。*sb*が一人称の場合には、上で見たのとは違って、
他者の頭のなかの状態に対する決めつけが関与しない。ある命題が自分にとってどう見えてい
るかとか、自分がどの程度「知らない」状態にあるかということは、たいてい、自分で直接体
験的に知ることができるものであるから、そこに上で見たような「決めつけ」は関与しない。
そのため、*sb*が一人称の場合には、「発話の妥当性の検証に無関心」という言葉の意味合いが上
で見たのとは違ってくる。

まず用法Iについて述べる。話し手が「*sb* (=私) にとって〈提示命題〉は真である可能性も
ある命題だ」という発話が妥当な発話であるかを検証することに関心であるというのは、す
なわち、〈提示命題〉の真偽を検証することに関心だということに等しい。たとえば(22)の話
し手は、発話の後にも先にも、当該の午後に妻が本当に酔っ払っていたのかを検証はしていな
い。(23)の話し手 (艦長) も、〈提示命題〉の真偽、つまり「なりすまし」で侵入したのだとい
う仮説が正しいかどうかを検証することには無関心であると考えられる。艦長はこのドラマエ
ピソードのなかで船員たちに警戒態勢をとらせているが、それは船員たちの命を守りたいから
であって、「なりすまし」仮説が正しいかどうかを検証したいからではないだろう。実際、以下
の(26)のように、〈提示命題〉の真偽を検証することに関心があることを示唆する文脈では**for all**
*sb knows*が不自然に響く。

(26) ? Why don’t you just call him? **For all I know**, he might still be home.

彼に電話してみれば。ひょっとしたらまだ家にいるかもよ。

Why don’t you just call him?で提案されている行為は、〈提示命題〉の真偽を検証することに相当
する行為であり、これが**for all sb knows**が意味の一部として持っている「発話の妥当性の検証に
無関心」という要素に抵触しているから(26)は不自然なのだ、と考えられる。

ここで次のような疑問が浮かぶかもしれない。3.4.1 では「〈提示命題〉の真偽への無関心」

という記述を誤りだとした一方で、ここでは「〈提示命題〉の真偽の検証への無関心」という記述が（少なくとも用法Ⅰで *sb* が一人称である場合には）適切だとするのはどうなのか。命題の真偽には関心を持ちながら、命題の真偽の検証には無関心だという状況は、実際のところあまりないのではないか。この疑問に対して筆者は、そのような状況はよく観察すれば日常に溢れている、と答えたい。何かについて「知れたら嬉しい、だけど調べるのは面倒くさい」と思った経験は誰にでもあるのではないか。実際、Google で検索してみれば、以下のような例が簡単に見つけられる。

(27) そこから見上げると

登山道のような

階段がずっと続いています。

この道は地図に描いてありませんが

集落まで通じてるのでしょうか？

さすがに調べる気には

なりません…

(http://usa-nekosando.pupu.jp/miti_ayuturibasi.html)

(28) このバグによって表示される文字に法則性があるのか気になりつつも

検証する気は全くないっていう、ね！ (<https://hati789.exblog.jp/m2009-04-01/>)

(29) 実際に聞いた人はすぐにライトをつけたいが、無視してライトをつけないとひどい目にあったりするものなのだろうか。興味が尽きないが検証する気はないので話はここまで。
(<https://ncode.syosetu.com/n3848cu/>)

このような現実世界に関する実情を踏まえると、〈提示命題〉の真偽への無関心ではなく〈提示命題〉の真偽の検証への無関心に密着した表現が英語に存在すると考えるのは、不自然なことではないだろう。

用法Ⅱの場合も同様に、〈提示命題〉の真偽の検証への無関心が示唆される。たとえば、音信不通になって久しい知人について *For all I know, he could be in a foreign country*.（「最近の彼がどうしているかを知らないから、外国にいる可能性も否定できない」＝「外国にいる可能性を否定できないくらい、最近の彼のことを知らない」）と言った場合、この発話は、本当に外国にいるかどうかを検証する気はない、というニュアンスを持つ。

最後に用法Ⅲについて述べる。用法Ⅲの場合、話し手は「〈提示命題〉は偽だろう」と思っているが少なくとも表面的には「〈提示命題〉は真である可能性がある」という意味の発言をしているため、〈提示命題〉の真偽を検証することに無関心であると言える。たとえば(13)で *For all I know, she could be my great, great, great, great grandmother* と発話した話し手は、まさか本当にローラースケートが自分の曾曾曾曾孫であるとは思っていないにもかかわらず、*she could be my great, great, great, great grandmother* と言っているのです、その不真面目さから考えると、〈提示命題〉

の命題の真偽を検証することに関心を持っているはずがないと言える（関心があるならばもっとありえそうなことを「ありえる（could）」と言うはずである）⁹。

3.5 for all sb knowsの位置

ここで for all sb knows と主節の位置関係について考えよう。本節は記述(10d)に対応する。大きく分けて、for all sb knows が主節に先行する場合と、主節の後ろにまわる場合、それから主節の内部に挿入される場合があるが、(i) 頻度は3分の1ずつ均等になっているのだろうか。(ii) そして、位置によって異なる特徴を示すということはあるのだろうか。本節は大規模コーパスを用いて (i) と (ii) の間に答えることを目標とする。

大規模コーパスとして COCA (the Corpus of Contemporary American English) を利用する。まず、検索式を {for all [pp*] [know]} とし、for+all+人称代名詞+know の活用形という連鎖を抽出する。ヒット件数は974件で、このなかにはOCRの読み取りの不備で判読不能であるものが3件、イディオムとしての for all sb knows ではないものや重複などノイズデータが6件、イディオムとしての for all sb knows が曲名として用いられているもの (*For All We Know*) が4件、イディオムとしての for all sb knows が節を修飾していないもの (e.g., *Maybe all night for all I know./ [...] if the aim was selfish, artificial, duplicitous, and—for all he knew—illegal*) が65件含まれている¹⁰。これらを除いた896件を実例の母集団として本節の議論を進める。

この896件を一つひとつ確認し、手作業で分類すると、for all sb knows が主節に先行する事例、主節の後ろにまわる事例、主節に挿入される事例の件数はそれぞれ以下になる。

表1 for all sb knows と主節の位置関係¹¹

for all sb knows が主節に	先行	後行	挿入	合計
件数	659	193	44	896
割合	73.5%	21.5%	4.9%	100%

for all sb knows が主節に先行するのが典型的で、主節の後ろにまわる用法の3倍以上の頻度で用いられていることが分かる。また、主節に挿入される頻度が極めて低いことも分かる。これで問 (i) に答えたことになる。

次に、問 (ii) について考えよう。上の3種を順に先行タイプ、後行タイプ、挿入タイプと呼ぶことにすると、先行タイプ、後行タイプ、挿入タイプのどれかに特有の特徴はあるのだろうか。答えはイエスだ。先行タイプと後行タイプを比較すると、法助動詞の有無について顕著な

⁹ 偽であると分かっているような命題を持ち出して冗談めかしたり何かを誇張したりする表現法については、平沢 (2014: 3.2 節) と Iwata (2015) も参照。

¹⁰ COCA の検索結果画面では合計 975 件と表示されるが、欠番が 1 件含まれているため、実際のヒット件数は 974 件である。

¹¹ 割合は小数点第二位以下を切り捨てて表示している。

違いがある¹²。

表2 位置タイプと法助動詞の有無¹³

	先行タイプ		後行タイプ		挿入タイプ	
法助動詞あり	272	(41.2%)	161	(83.4%)	28	(63.6%)
法助動詞なし	387	(58.7%)	32	(16.5%)	16	(36.3%)
合計	659	(100%)	193	(100%)	44	(100%)

先行タイプ (For all *sb* knows, SV.) では、それなりにバランスの取れた分布を示すものの、法助動詞がない場合の方がある場合に比べてやや多い。これに対して後行タイプ (SV, for all *sb* knows.) では、法助動詞を伴う場合の方が伴わない場合に比べて圧倒的に高頻度である。

この言語事実はただの偶然の産物ではないだろう。3.3 節で述べたように、for all *sb* knows を使った場合には、法助動詞を伴っても伴わなくても文全体には推量の意味が読み込まれる。先行タイプ (For all *sb* knows, SV.) では、聞き手は SV を解釈する前に For all *sb* knows に触れているので、SV に法助動詞が含まれていようがいまいが、SV を推量文として解釈しようと思うことができる。言ってみれば For all *sb* knows が道路標識のようにして役立っているわけである。一方、後行タイプ (SV, for all *sb* knows.) では、もし SV に法助動詞が入っていなかったら、聞き手は、for all *sb* knows に到達する時点まで、文全体の意味に推量に関わっていることに気がつかないかもしれない。大げさに言えば袋小路文のような認知負荷の高い文になってしまう可能性があるということである。もしも SV に法助動詞が入っていれば (英語は SVO 型言語で法助動詞が文のはじめの方に来るので) 文を聞き始めてから比較的早いタイミングで文全体の解釈が推量解釈に引き寄せられることになる。これにより、文の終わりのほうで for all *sb* knows を聞いた聞き手が突如現れた推量の意味合いに戸惑うということが起こらずに済む。このような事情を考えると、後行タイプで SV が法助動詞を伴うことが多いのは、聞き手の認知負荷を減らそうという話し手の心理傾向の現れであると解釈できる。

実際、後行タイプで法助動詞を伴っていない 32 件のうち 8 件は SV が maybe や perhaps などの法副詞を含んでいる。たとえば(30)では、法副詞 maybe の存在により聞き手は for all *sb* knows に到達するよりも前に推量解釈に方向付けされる。他にも、(31)のように for all *sb* knows よりも前に or で色々なものを列挙することによって「事実と確定できていない」「憶測にすぎない」という印象を与える用例も複数ある。

(30) Or maybe she was, for all I know.

(COCA)

¹² なお、用法 I, II, III と文内位置の関係も知ることができれば理想的だが、コーパスで得た用例は分析者にとって部分的なコンテキストしか分からない危険物であり、896 件の英文すべてについて用法 I, II, III への分類を行うことなど不可能である。従ってその理想は諦めざるをえない。

¹³ 割合は小数点第二位以下を切り捨てて表示している。

いや, その可能性 (=彼女が別の男と寝た可能性) も僕には否定できないな。

- (31) The truck jolted now and then to the resounding blow of a hurtling eucalyptus bole, or chunk of rock, or kangaroo, for all I know. (COCA)

私たちの乗ったトラックは, 時折何かに衝突してドーンと音を立て, 大きく揺れた。

ぶつかったのはどうせユーカリの幹か, 岩の塊か, カンガルーだろう。

この事実は, 先行タイプと後行タイプで法助動詞の生起頻度が大きく異なることの理由を「後行タイプでは話し手が聞き手の認知負荷に配慮する必要があるため」とする筆者の立場を裏付けるものである。

3.6 for all sb knowsのsbの人称について

本節では, for all sb knowsのsbにどのような人称の代名詞が用いられることが多いかを調べる。前節と同様に, COCAで{for all [pp*] [know]}を検索して得られる974件のデータから, OCRの読み取りの不備で判読不能であるもの(3件), イディオムとしてのfor all sb knowsではないものや重複などノイズデータ(6件), イディオムとしてのfor all sb knowsが曲名として用いられているもの(4件)を除いた961件を母集団とする。調査結果をまとめたものが以下の表3である。

表3 for all sb knowsのsbの人称

人称	人称代名詞	件数		割合
一人称	I	452	674	70.1%
	we	222		
二人称	you	64	64	6.6%
三人称	she	87	223	23.2%
	he	99		
	they	37		
合計		961	961	100.0%

一人称代名詞(特にI)が非常に高い割合を占めていることがわかる。一部の辞書がfor all sb knowsではなくfor all I knowを項目として立てていることにも納得がいく。

3.7 文体的特徴: 本当に「文体的」か?

(10f)について確認しよう。コーパスとして再びCOCAを利用する。COCAはデータが「サイズの等しい5つのジャンル(話し言葉, フィクション, 大衆雑誌, 新聞, 学術誌)に分けられて」いるので(赤野・堀・投野2014: 28), 文体的特徴を掴むのに有用である。検索式を{for all [pp*] [know]}([pp*]は人称代名詞, [know]はknew, knowsなどknowの活用形)として検索した結果

を表にまとめたものが表4である。なお、表4に示したデータは、3.5節で言及した欠番（1件）、OCRの読み取りの不備で判読不能であるもの（3件）、イディオムとしてのfor all *sb* knowsではないものや重複などノイズデータ（6件）、イディオムのfor all *sb* knowsが曲名として用いられているもの（4件）を手作業で取り除いたデータ（961件）を母集団とするものであり、単純にCOCAでfor all [pp*] [know]を検索したときに表示されるジャンル別データ件数とは異なることに注意されたい。

表4 for all *sb* knowsのジャンル別頻度¹⁴

ジャンル	COCA全体での 生起回数	割合
話し言葉	118	12.2%
フィクション	661	68.7%
大衆雑誌	83	8.6%
新聞	66	6.8%
学術誌	33	3.4%
合計	961	100.0%

このデータは、一部の辞書が指摘しているように for all *sb* knows が（少なくともどちらかと言えば）口語的な表現であることを示している¹⁵。

ここで注意しなければならないのは、おそらくこの文体的特徴は純粋に文体的なものではなく、for all *sb* knows の意味的特徴と連動したものだということである。具体的には、for all *sb* knows が学術文章で用いられにくいのは、発話の妥当性の検証に無関心であることが学術文章において（原則として）よしとされないことだからだと考えられる、ということである。実際、発話の妥当性の検証に無関心であることが許される文脈が整っていれば、for all *sb* knows は学術文章でも使われうる。実例を見てみよう。以下の For all we know ...は用法Iの例である。

- (32) [...] the key question in characterizing a biological function is not what a trait is typically *used* for but what it is *designed* for, in the biologist's sense—namely, which putative function can predict the features that the trait possesses. **For all we know**, hands might be used more often in fidgeting than grasping, but that would not make fidgeting the biological function of the hand. The reason is that hands have improbable anatomical features that are

¹⁴割合は小数点第二位以下を切り捨てて表示している。

¹⁵ 口語表現であるのに「話し言葉」で12.2%しか用いられていないのはやや奇妙である。これには、COCAの「話し言葉」のデータがテレビ番組やラジオ番組での会話から採られていることが関係しているのかもしれない。具体的には、テレビ番組やラジオ番組における会話参加者は「自分の発言が放送される」ということを認識しているため、自分が知識・情報を十分に持っておらず発話の妥当性を検証することにも関心がない、ということを示してしまう for all I know を使おうという気持ちになりにくいかもしれない。

necessary for grasping but not for fidgeting. (Pinker and Jackendoff 2005: 224)

[...] 生物学的な機能の特徴づけるうえで重要な問題は、ある形質が典型的にはどのようなことのために使われているかではなく、生物学者の言葉遣いで言えば、どのようなことのために設計されているか—すなわち、機能とされているもののうち一体どれならばその形質が持っている諸特徴を予測することができるか—ということである。たとえば、実のところどうなのか知らないのだが、手という形質は、ものを握るのに使われる頻度よりも、無意味にそわそわと動かすのに使われる頻度の方が高い可能性がある。しかし、もしこれが正しかったとしても、だからといってものを無意味にいじることが手の生物学的な機能だということにはならない。その理由は、手には特殊な構造上の諸特徴が備わっており、その諸特徴はものを握るのに必要だが無意味にそわそわと動かすのには必要でないものだからである。

(32)において、Pinker と Jackendoff が 1 文目だけで終えず、hands might be...以降の内容を足したのは、1 文目で提示した「生物学的な機能は使用ではなく設計の観点から規定されるものだ」という抽象的で分かりにくい主張を、感覚的に分かりやすいものにするためである。従って、具体例として挙げる命題は、「機能」、「使用」、「設計」という 3 つの概念の関係性を分かりやすく伝えてくれるものであれば何でもよく、その命題が現実世界に照らして真である必要はない。だから、今回の文脈では、学術論文であるにもかかわらず、ほとんど例外的に、発話の妥当性の検証に無関心であることが許され、for all sb knows が使用できるのである。実際、同じ論文の中でも（つまり同じ文体的特徴をもった文章内でも）、こうした適当なものの言いが許されないような箇所では for all sb knows を使うことはできない。たとえば次の as far as we know を for all we know に変えることはできない。

- (33) [...] the rule-governed recombination of a repertoire of tones, which appears in music, tone languages, and more subtly in intonation contours of language, is as far as we know unparalleled elsewhere. (Pinker and Jackendoff 2005: 211)
- [...] 音の高低のレパートリーを規則に従ってさらに組み合わせるというプロセス（音楽、声調言語、そしてそこまではっきりした形ではないが言語の音調曲線に見られるプロセス）に匹敵するものは、我々の知る限りでは、人間以外の動物には見られない。

この as far as we know を for all we know に書き換えると、「音の高低のレパートリーを規則に従ってさらに組み合わせるというプロセス」が本当に「人間以外の動物には見られない」のか、ということに関して、一流の言語学者が 2 人揃って「検証することに関心を持っていない」と言っているように聞こえてしまう。

以上の議論から分かるように、for all sb knows の文体的な特徴（どちらかと言えば口語寄り

の表現であるという特徴)は、意味と切り離して考えてはいけない。事実関係をよく知らない状況で適当にものを言い、検証するつもりがないと示唆するその行為が、口語的な発話を行うような場面と相性が良く、学術的な場と合わない行為だということなのである。

4. 辞書記述に関する提案

本節では *for all sb knows* の辞書記述に関して提案を行う。前節では *for all sb knows* の意味と使用に関する事実を詳細に記述したが、この情報全てを紙幅の限られた学習者用英和辞典に含めることは到底不可能である。通常の言語学論文であればそれを気にする必要もないのかもしれないが、本稿は現状の英語辞書の記述を批判的に検討することから議論を始めたのであるから、辞書に含めようがないほどの詳細だけ提示して逃げるのはフェアではないだろう。筆者が提案する辞書記述は以下の通りである。

- (34) *for all I know* [主に文頭で] (1)「情報を十分に持っていない自分には、…という可能性も否定できない」、「ひょっとしたら…かも」(※本当に「…」なのかを調べるつもりはなく適当にものを言っているというニュアンスを伴う) || e.g., *Cate said she'd bought a yacht. For all I know that's another lie of hers.*「ケイトがクルーザーを買ったと言っていたけど、またお得意の嘘かもしれないなと思ってしまおうよ」| *I used to play with those toys too. For all I know, they might still be at my parents' house.*「僕も昔そういう玩具で遊んだよ。ひょっとしたらまだ実家にあったりするのかも」; (2)「…という可能性も否定できないほど自分は情報不足だ」、「事情を知らないこっちからしたら、…だって言われても信じてしまうくらいだよ」(※時に冗談めかして「…」にありえない事柄を当てはめて言う) || e.g., *When it comes to antiques, I don't know my ass from my elbow. For all I know, that dish you're eating from could be worth more than \$100,000.*「骨董品のこととなると僕はからっきしダメなんだ。たとえば君が使ってるその皿が実は 100,000 ドル以上すると言われたら信じちゃうくらいさ」| *Who are you anyway? For all I know, you could be a fox in the disguise of a man.*「そもそもあんた誰なんだい? こっちに言わせりゃ、人間に変装した狐かどうかとも分からんくらいだ」

辞書記述であることを意識して下したいいくつかの決断について、以下コメントしていく。まず、項目として *for all sb knows* ではなく *for all I know* を立てたのは、一人称主語の頻度の高さを反映してのことである。次に、「主に文頭で」としたのは、事実として文頭位置が最も高頻度だからという理由のほかに、「自分で *for all I know* を使うときには文頭で使うようにしよう」と心がけていれば、文末の場合とは違って、主節で助動詞を言い忘れても聞き手に推量文(可能性について語った文)として解釈してもらえるからという理由もあつてのことである。またこれに連動して、助動詞の有無についての記述を含める必要性も減らすことができる。最後に、用法を1つにまとめず2つに分類するとスペースをとるが、これはやむを得ないことだろう。

第3.2節で見たような多義性は何かしらの分類をしない限りには表現できない。ただし、3分類ではなく2分類の体系を採用することで、多少の紙面の節約はできる。(34)では、(10)で言うところの用法Ⅱがカバーされないことになるが、用法Ⅱは用法Ⅰの一種と言っても用法Ⅲの一種と言っても問題ないものであるから、掲載されていないことによって発生する問題の程度は小さいと判断した。

5. 動機付け: for all sb knows と関連するその他の表現

5.1 動機付けとは

英語話者はfor all sb knowsをいかにも英語らしい表現であると感じる。これは、for all sb knowsはイディオムでありながらも他の英語表現と何らかの点で関連し合っている、どこか似ている、と感じられているということであり、英語に関する知識体系のなかで離れ小島のようにはないということである。もっとも言語表現は、ほかの表現と全く似ておらず離れ小島のようになっている習得されたり広まったりする——たとえばTuggyの娘Daleが作った[ʔʔʔ]という架空の友だちの名のように(Tuggy 1996)——のだが、実際には、表現E₁にはそれと似ているまたは関連していると感じられる表現E₂, E₃, E₄...が存在し、これによってE₁の習得が容易になっている場合が大半である¹⁶。それでは、for all sb knowsは一体どのような英語表現と関連し合っているのだろうか。

5.2 for all sb knows以外のfor all ...表現とfor all sb knowsの関連

まず無視できないのはfor all sb caresというイディオムである(COCAで{for all [pp*] [care]}を検索すると121件がヒットする)。for all I knowの裏に“I don’t know”が潜んでいるのと同じように、for all I careの背後には“I don’t care”が潜んでいる。以下の用例から明らかだろう(ただし下線と斜体が施されている理由については脚注17を参照)。

- (35) Taxes are so high now because the people of this country voted were stupid enough to vote in a so-called progressive government. Well, they can *stew in their own juice* **for all I care**. I’m going abroad to live. (マケーレブ・安田 1983: 639)

税金がこんなに高いのは、この国の国民が愚かにも進歩的政府とやりに投票したからだ。それならそれで、みんなは勝手に苦しめばいいさ。おれは外国に行って暮らすんだ。

- (36) If you don’t like the way I do things, you can just (go) *jump in the lake* **for all I care**. (マケーレブ・安田 1983: 659)

おれのやり方が気に入らないのなら、どうにでも勝手にするんだな。

- (37) You can *starve* **for all I care**. (『ウィズダム英和辞典』s.v. “care”)

¹⁶ このような状況を、認知言語学では「E₂, E₃, E₄... がE₁を動機付けている」と言ったり「E₂, E₃, E₄... がE₁に生態的地位(ecological niche)を与えている」と言ったりする(Lakoff 1987: 438, Taylor 2004)。

君が飢え死にしようと思ったことではない。

- (38) They can fire me for all I care. (『ロングマン英和辞典』 s.v. “care”)

首になったって全然平気さ。

- (39) Female driver: I will not pay you \$20 to tow my car.

Tow truck driver: Lady, you can stay here all day for all I care.

(Columbo, Episode 27, Negative Reaction)

女性ドライバー： あたしやねえ、車を引っ張ってってもらうのに 20 ドルなんて払わないからね。

レッカー車ドライバー： 奥さん、それなら一日中ここにいらいいですよ。私は知ったこっちゃない。

この for all I know→I don't know, for all I care→I don't care という類似性を考えると, for all I care は for all I know と関連し合っていると言える¹⁷。

また, for all ... には以下のような用例もある。なお, 各例の訳文の下に斜体で示したのは for all...の背後に隠れている否定命題である。

- (40) Well, you could try apologizing to her—for all the difference it will make.

(<https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/for-all-the-difference-sth-makes>)

彼女に謝ってみるという手も、まあ、あるにはある。どうせあまり効果はないだろうけど。

→it will not make any difference

- (41) 話し手は、兵隊の人形を大量に購入して、将軍のオフィスにジオラマを作り、将軍の誕生日のサプライズ・プレゼントにしようと計画している。

The general's office is off limits until his party. I've got it locked off, for all the good that'll do us without any soldiers. (Columbo, Episode 49, Grand Deceptions)

将軍のオフィスは誕生日パーティーのときまで立ち入り禁止だ。閉め切っておいた。まあそんなことしても注文した兵隊の人形が届かなかったら何にもならんが。

→that'll not do us any good without any soldiers

- (42) [...] she understood that Stanley had no idea what she was talking about, that she could have been talking Japanese for all the sense it made to him [...] (Paul Auster, 4 3 2 1)

ローズは理解していた。スタンリーからすれば、自分が何を言っているのか全く分

¹⁷ ただし、「for all I know はだいたい I don't know という意味だ」ということだけを覚えても for all I know を適切に使えるようにはならない(第3節で見た諸特徴を予測することは不可能である)のと同じように、「for all I care はだいたい I don't care という意味だ」とだけ覚えても for all I care を適切に使えるようにはならない。たとえば、上の例の下線部および斜体部に注目すると, for all I care が基本的には「can+好ましくないはずの行為」に関して使う表現であることが分かる。こうした実情は「for all I care はだいたい I don't care という意味だ」と覚えるだけで予測できるものではない。

からないのだということを。ここまで意味不明だともはや日本語を喋られているようなものなのだというを。

→*it did not make any sense to him*

- (43) [...] **for all the notice they pay to Brick as he urges them to stop**, he might as well be invisible. (Paul Auster, *Man in the Dark*)

ブリックが「止まってくれ」と必死に頼んでいるのにこうも注意を向けてくれないのでは、透明人間になってしまったも同然だ。

→*they did not pay any notice to Brick as he urges them to stop*

- (44) I could have been drinking iced water **for all the effect those cocktails had had on me**. (Hester Browne, *The Little Lady Agency*)

カクテルの影響はゼロ。もはや氷水を飲んでいるのと変わらなかった。

→*those cocktails had not had any effect on me*

このような類似性から, *for all sb cares* 以外の *for all ...* 表現も *for all sb knows* と関連し合っていると考えられる¹⁸。別の見方をするならば, *for all sb knows* は, *for all sb cares* とともに, *for all ...* 構文の事例のうち慣習化が進んだものであると言うことができる。これを図示すると以下のようになる。枠の太さは慣習化・定着の度合いを反映している。

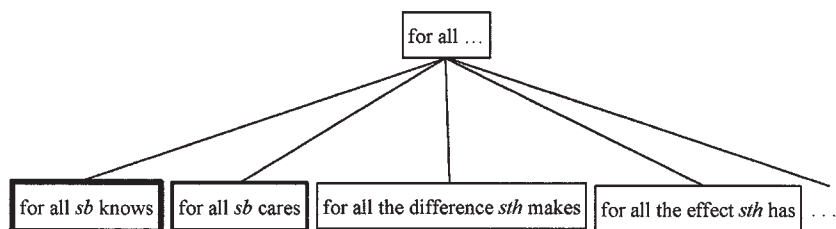


図 1 *for all ...*表現のネットワーク

ここで, 私は「母語話者が持っているのは *for all ...*に関する知識だけであって, *for all sb knows* についての個別具体的な言語事実は覚えていないはずだ (= *for all sb knows* は知識の単位ではないはずだ)」と主張しているのではないことに注意されたい。 *for all sb knows* は *sb* を人称代名詞に限っても COCA でヒット件数が 960 を超えるほどの高頻度表現であり, これ自体ひとつの単位として記憶されていると考えるのが妥当である。管見の限り全ての英英辞典でイディオムとして定義されていることを見ても, *for all sb knows* が知識の単位として地位を確立している

¹⁸ *for all sb knows* との類似点として興味深いのは, 否定命題が隠れているだけでなく, 3.2 節の用法 III と同じように極端な事例を持ち出す例が見つかることだ。(42)の「ローズは日本語を喋っている」, (43)の「ブリックは透明人間になってしまった」, (44)の「私は氷水を飲んでいる」は偽であることが明白でありながら持ち出された命題である。これは(13)の「今のローラースケートは曾曾曾曾婆さんだ」や(14)の「ガードナー夫人が撃ってくる」が, 偽であることが明白でありながら持ち出された命題であったのと平行的である。脚注 9 も参照。

ことは疑いようがない。また、第3節で詳細に記述した *for all sb knows* の特徴の全てを *for all ...* の特徴から予測することは不可能であるように思われる。たとえば、あるインフォーマントによれば *for all sb knows* 以外の *for all ...* は節の最後に置きたいという直感がある（例文(40)-(44)も参照）とのことであり、実際、COCA における *for all sb cares* (121 件) の分布を見てみると節の末尾の事例が大半で、節の頭に置かれた例は 11 件（約 9.0%）しかヒットしないが、*for all sb knows* は 3.5 節で見た通り節の頭に置くのが普通である。結局のところ、私がこの 5.2 節で主張しているのは、あくまでも「*for all sb knows* は英語の体系のなかで離れ小島のようにはない」という程度のことなのである。関連表現が他に複数あるとはいっても、*for all sb knows* のことは *for all sb knows* のこととして覚えなければいけない。

5.3 *for all sb knows* 以外の *all* 表現と *for all sb knows* の関連

次に、*for all sb knows* は *all* のどのような用法と関連し合っているのか考えてみよう。第一義的には *all* は「全て」を表したり数量の多さや程度の大きさを強調したりする（このような典型的な *all* を「上げる *all*」と呼ぶことにする）ということを出してみると、*for all sb knows* の *all* は、むしろ、知識量の少なさと結びついているという特殊性に気付く（このような *all* を以下では「下げる *all*」と呼ぶ）。しかし特殊とは言っても「下げる *all*」は *for all ...* にしか現れないわけではない。たとえば、マライア・キャリーとビートルズの名曲のタイトルに使われている、*all* を先行詞とする関係詞節を含んだ構文が良い例だろう。

(45) **All** I want for Christmas is you.

クリスマスに欲しいのはあなただけなんだから。

(46) **All** you need is love.

必要なのは愛だけだ。

「必要なもの、クリスマスにほしいものを全てかき集めても、その数は 1 つ、1 人である」と述べることで、必要なもの、クリスマスにほしいものの量の少なさを伝達している。「だけ」という日本語を使うと自然な訳になりやすいことは、この *all* が数量の少なさや程度の小ささを伝達することと関連している。こうした「下げる *all*」の用法の現れの一つが *for all sb knows* というイディオムであると言えるだろう。

5.4 *for all sb knows* 以外の *for* 表現と *for all sb knows* の関連

次に、*for all sb knows* と *for* の関係について考える。*for* には、考慮の範囲を限定する用法がある。「考慮する範囲を…に限定すれば、～と言える」の「考慮する範囲を…に限定すれば」の部分 *for ...* に対応する。以下の例にあるように、典型的には「…にしては」と訳される¹⁹。

¹⁹加藤・花崎 (2006) と花崎・花崎 (2012) はこの *for* に *<considering>* というラベルを貼っている。

- (47) まだ幼稚園にも通っていない息子 Cooper について
 He's pretty smart **for his age**. (*Full House*, Season 6, Episode 15, Be True to Your Pre-School)
 うちの子はこの年齢にしてはなかなか賢くてね。
- (48) Oh. His Majesty himself? Well, that's very thoughtful **for** a busy man.
 (*Columbo*, Episode 33, A Case of Immunity)
 え。国王ご自身から？お忙しいのにお気遣いいただいて。
- (49) You're pretty strong **for** some clown who thinks he's Batman.
 (*Batman Beyond*, Season 1, Episode 1, Rebirth, Part 1)
 お前さん、自分のことをバットマンだと思っ込んでるお調子者にしちゃあ、なかなか強いじゃねえか。
- (50) You know a lot **for** someone who can't find his way past Saturn.
 (*Star Trek: Voyager*, Season 3, Episode 8, Future's End, Part 1)
 あなた、土星展示コーナーで道に迷った人にしてはずいぶん物知りね。
- (51) いつもステファニーの言動を馬鹿にしている D.J.の発言
 She's acting very strange, even **for her**.²⁰ (*Full House*, Season 3, Episode 16, Bye, Bye Birdie)
 ステファニーの様子がおかしいわ。いくらステファニーだとはいっても。

この用法では「通常の想定, 平均」との比較が行われ, そのうえで判断がくだされる。たとえば, (47)の話し手は, 幼稚園に通う前の子どもというカテゴリーに考慮の範囲を限定し, そのカテゴリーに属する子どもが持つ平均的な知性と比較して, 自分の息子の知性はなかなかのものだと言える判断している。(49)の話し手は, 考慮の範囲を「自分のことをバットマンだと思っ込んでるお調子者」というやや変わったカテゴリーに限定し, そういうお調子者がいかにも持っていそうな力(つまり弱い力)と比較して, 聞き手の力をなかなか強いと褒めている。(51)の話し手は, 考慮の範囲をステファニーという個人に限定し, その通常の行動のおかしさと比べてもなおこの日のおかしさの方が上だ, と言っている。

考慮の範囲を限定する用法のなかには, 「…にしては」「…にしても」と訳せないものも含まれる。たとえば(52)のように対比の文脈に現れることもあれば, (53)のようにイディオムの一部になっていることもある (hold for ...は「…に当てはまる」の意, You can't beat A for Bは「B

²⁰ X is Y, even for Z (Yは「奇妙だ, 変だ」を意味する形容詞)「XはYだ。いくらZと言えども」はパターン化している可能性がある。

- (i) That was weird. Even for him. (*The Big Bang Theory*, Season 3, Episode 13, The Bozeman Reaction)
 なんか変だったわよね。いくらシェルドンと言えども。
- (ii) 日頃から人間を馬鹿にしている魔女のセリフ:
 Hey, she's pretty weird. Even for a mortal! (*Bewitched*, Season 2, Episode 12, A Strange Little Visitor)
 ねえ, 今のおばさん変な人だね。いくら人間といってもねえ!

でAに敵うものはない」の意で、いずれもイディオムと言える)。

- (52) Looking at two domains, color and physical objects, Rosch and Mervis [...] state that a prototype — or clearest case of category membership — is determined by different criteria in each domain. **For** color, the basis of prototypes is psychological: some colors are perceptually salient and act as focal points for each category. But **for** concrete objects, prototypicality is linked with the distribution of attributes: the more prototypical a member is rated, the more attributes it has in common with other members of the category, and the fewer attributes in common with members of contrasting categories. (Herskovits 1986: 54)
- 色と物理的物体という二つの領域に注目して、Rosch と Mervis [...] は、プロトタイプ—カテゴリーに属しているということが最もはっきりしている事例—を決める基準は領域ごとに異なると述べている。色に関して言えば、プロトタイプを決める基準は心理的なものである。一部の色が目立って見え、各カテゴリーの中心として機能するのである。しかし具体的な物体に関しては、プロトタイプ性は属性の分布と結びついている。つまりプロトタイプ性が高いと評価される成員であればあるほど、そのカテゴリーの他の成員と共通に持っている属性の数が多くなり、対立する別のカテゴリーの成員との共通点が少なくなっていくのである。
- (53) a. This does not hold **for** count nouns. (Langacker 2008: 142)
可算名詞に関してはこれが成り立たない。
- b. You can't beat our furniture **for** quality. (Harrap's Essential English Dictionary)
品質の点で言えばうちの家具は向かうところ敵なしですよ。

for all *sb* knows の **for** も考慮の範囲を限定する用法の一種だと言えるかもしれない。たとえば For all I know, you were drunk this afternoon. の発話者は、you were drunk this afternoon と判断する根拠として考慮する範囲を all I know 「自分が持っている非常に少ない情報」に限定している。For all I know, she could be my great, great, great, great grandmother. 「今ぶつかってきた人が私の曾曾曾婆さんだと言われても信じるくらいよ」の発話者は、考慮する範囲を all I know 「自分が持っている非常に少ない情報」に限定しているからこそ she could be my great, great, great, great grandmother という極端な発言ができるわけである。

なお、ここで再び注意しておきたいのだが、for all *sb* knows に **for** の考慮範囲限定用法と all の「下げる all」用法の貢献があるといっても、それは、**for** の考慮範囲限定用法と all の「下げる all」用法さえ知っていれば for all *sb* knows についての具体的な言語事実を覚える必要はないということではない。for all *sb* knows に触れたことのない英語学習者に、**for** の考慮範囲限定用法と all の「下げる all」用法を教えたなら、途端にその英語学習者が for all *sb* knows という言い方を思いつき、第3節で示した通りの使い方を使い始めるということはいえない。結局のところ、for all *sb* knows のことは for all *sb* knows のこととして覚えるしかない。

5.5 今後の課題: for all ...表現に「上げるall」が現れるパターン

ここでは, for all ...表現の用法のなかに for all *sb* knows とほとんど関係がないように思われるパターンもあることを指摘し, 上の 5.2 節の説明が, 都合の良いところだけを取り出した部分的な説明であったことを認めたい。

考慮範囲限定用法の for に続く名詞句に「上げる all」が現れることがある。

- (54) **For all the time we'd spent together, for all the kindness and patience Morrie had shown me when I was young, I should have dropped the phone and jumped from the car, run and held him and kissed him hello.**

Instead, I killed the engine and sunk down off the seat, as if I were looking for something.

(Mitch Albom, *Tuesdays with Morrie*)

あれほど長い間いっしょに時を過ごし, 若いぼくにあれほど親切に辛抱強く接してくれたことを思えば, 電話などほっぽりだして車から飛びおり, しっかりモリーを抱いて, こんにちはのキスをするのが当然だった。

ところがぼくはエンジンを切ったあと, さがしものでもしているようなかっこうでシートの下にかがみこんだ。

(別宮貞徳 (訳) 『モリー先生との火曜日』)

- (55) **For all his wealth, he lived modestly.** (小西友七 1976: 300)

裕福な人の割に, 彼は質素な暮らしをしていた。

- (56) **She is stupid for all her learning.** (小西友七 1976: 300)

彼女は学があるのに間が抜けている。

should have done ... 「…すべきだった」や he lived modestly, She is stupid といった判断を下すにあたって根拠として考慮・参照する範囲が for 句で示され, そのなかで数量の多さや程度の大きさを示す all が用いられている。

さらに, (55)と(56)のような例に含まれている逆接・対比の意味のみが残り, 「考慮すると」や「と言える」など判断に関わる意味要素が消えた次のような用法も定着している。

- (57) **For all the noise I make with my friends, I am still not comfortable talking about my feelings in front of others—especially not classmates.** (Mitch Albom, *Tuesdays with Morrie*)

友だちといっしょにわいわいやっていても, 他人の前で, 特にクラスメートの前で, 自分の気持ちをしゃべるのは苦手だ。(別宮貞徳 (訳) 『モリー先生との火曜日』)

- (58) **I took in little details, things I hadn't noticed for all the times I'd visited.**

(Mitch Albom, *Tuesdays with Morrie*)

今までたびたび訪れながら気にとめなかったものを, しっかり取りこむ。

(別宮貞徳 (訳) 『モリー先生との火曜日』)

- (59) To the best of my knowledge, **for all** the talk this question has engendered over the years, there have been very few attempts within the profession to formulate an official answer.

(Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day*)

私の知る限りでは、長年に渡ってこの問い (= 良き執事とはどのような執事かという問い) をめぐってたくさんの議論がなされてきたにもかかわらず、業界内部で正式な答えを用意しようという試みはほとんどなされていない。

次の例は、漫画についての理論的考察を行った漫画である *Understanding Comics* からとった。漫画家 Scott McCloud が自分なりの comics の定義—「絵など視覚で捉える対象を意図的な順番に並べたもので、情報を伝達したり、見る側の美的経験を誘発したりすることを意図したもの」—を提示し、その定義により従来 comics だと思われていなかったもの (古代エジプトの壁画、飛行機の機内安全のしおりなど) を comics のカテゴリーに引き入れることができるということを指摘したあとの場面である。

- (60) **For all** the doors that our definition opens, there is one which it closes.

(Scott McCloud, *Understanding Comics*)

僕たちの定義によってたくさんの扉が開くことになる一方で、閉まってしまう扉が一つあるんだ²¹。

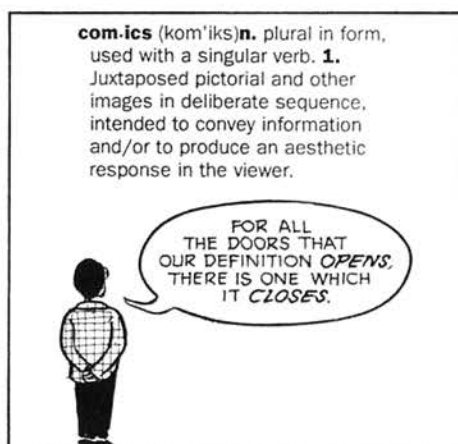


図 2 例文(60)のコマ

(54)-(60)は、for all ...表現の all が「上げる all」である場合があることを示している。このようなタイプの for all ...は for all *sb* knows と密接な関係にあるとはいい難い。5.2 の図 1 は話を単純

²¹ 本稿の内容には関係しないが、McCloud の定義で comics というカテゴリーから閉め出されることになるのは、一枚絵である。

化しすぎている。for all ...の全体像を記述するような包括的研究を行わない限り, 本当の意味で for all ...と for all *sb* knows の関係を論じたことにはならないだろう。これについては今後の課題としたい。

6. 結語

本稿では, 現代英語における for all *sb* knows の使われ方を詳細に記述し, その記述をもとに辞書記述の提案も行った。そして for all *sb* knows が他の for all ...表現, for の考慮範囲限定用法, 「下げる all」と関係し合っており, 離れ小島のようにはなっていないことを指摘した。ただし, for all ...表現一般についての分析がまだ不十分であり, これについては今後の課題とした。

参考文献

- 赤野一郎・堀正広・投野由紀夫 (2014) 『英語教師のためのコーパス活用ガイド』東京: 大修館書店。
- Davies, Mark. (2008-) *The corpus of contemporary American English: 425 million words, 1990-present*. Available online at <http://corpus.byu.edu/coca/>.
- 花崎美紀・花崎一夫 (2012) 「Forの意味論再考」『人文科学論集: 文化コミュニケーション学科編』46: 85–108.
- Herskovits, Annette (1986) *Language and spatial cognition: An interdisciplinary study of the prepositions in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 平沢慎也 (2014) 「『クジラ構文』はなぜ英語話者にとって自然に響くのか」『れにくさ』第5号 (柴田元幸教授退官記念号) 第3分冊, 199–216.
- Iwata, Seizi (2015) *And mockery: A two-layer account*. *Language Sciences* 50: 30–48.
- 加藤鉦三・花崎美紀 (2006) 「FORの意味論: その歴史的考察」『人文科学論集: 文化コミュニケーション学科編』40: 59–77.
- 小西友七 (1976) 『英語の前置詞』東京: 大修館書店。
- Lakoff, George (1987) *Women, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- マケーレブ, ジャン・安田一郎 (1983) 『アメリカ口語辞典』東京: 朝日出版社。
- 中村保男 (2002) 『新編 英和翻訳表現辞典』東京: 研究社。
- Pinker, Steven and Ray Jackendoff (2005) The faculty of language: What's special about it? *Cognition* 95: 201–236.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) (2015) 『明解言語学辞典』東京: 三省堂。
- Taylor, John R. (2004) The ecology of constructions. In Günter Radden and Klaus-Uwe Panther (eds.)

- Studies in linguistic motivation*, 49–73. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Tuggy, David (1996) The thing is is that people talk that way. The question is is why? In: Eugene H. Casad (ed.) *Cognitive linguistics in the redwoods: The expansion of a new paradigm in linguistics*, 713–52. Berlin: Mouton de Gruyter.

All I Know about *for all I know*: Meaning, Usage and Motivation

Shinya Hirasawa

Keywords: polysemy, modality, evidentiality, sentence position, style and meaning, motivation

Abstract

The present paper reveals six characteristics of *for all* somebody (henceforth, *sb*) *knows*. (1) A sentence including *for all sb knows* is potentially ambiguous between two interpretations: ‘since *sb* does not possess much relevant knowledge or information, they cannot dismiss the possibility that the proposition in the main clause is true’ and ‘*sb* knows so little that they cannot dismiss the possibility of the main clause proposition being true.’ Context helps determine the interpretation, but sometimes one and the same sentence can be interpreted in either way without being incongruent with the surrounding context. (2) The interpretation of a sentence including *for all sb knows* involves the concept of inference or possibility (i.e., it does not sound like an assertive sentence) even when the main clause does not contain any modal auxiliaries. (3) *For all sb knows* makes the sentence sound like a casual chance remark made by a speaker who is not interested in validating their statement. (4) *For all sb knows* favors clause-initial position over medial or final position. (5) The *sb* slot is in most cases filled by a first person pronoun (most frequently *I*). (6) *For all sb knows* is for the most part used in an informal style. It is possible however to use it in a formal style, even in academic writing, provided the context allows one to make a noncommittal statement. The present article further discusses the relations between *for all sb knows*, on the one hand, and other *for all* expressions, *all* expressions and *for* expressions, on the other, and concludes that *for all sb knows* is not completely isolated from the rest of the language; it is ‘motivated’.

(ひらさわ・しんや 東京大学非常勤講師)